

2020年9月27日

忘れないで

年間第26主日は、世界難民移住移動者の日にあたっています。世界中で増え続ける難民・移住移動者の方々の厳しい生活環境が少しでも改善され、必要な助けが得られるよう祈りと献金をささげましょう。

難民の方々を思うとき、わたしがすぐに思い出すのは二年前、教皇庁宣教事業のローマ総会で出会ったシリアの司教の報告です。シリアの司教さまは次のように緊急の報告をされました。

「七年間の戦争が続いているシリアからの報告です。シリアに住むキリスト者はシリア市民として生活していますが、ここ五年にわたり教会は困窮するシリアにさまざまな人道的支援を行い、シリア人が生き延びるため必要なことに尽力しています。現在、人々は物質的支援だけが欠乏しているのではなく、むしろ心理的な傷や、身体的な疾病、家族の分裂、離婚、そのようななかで生きています。ご存知のようにシリアは、アンティオキアに近く、最初のキリスト者が活動した歴史的な場所ですが、今、シリアに『とどまる (restare)』ということ自体がわたしたちにとって一つの『挑戦』であり、これまでに起きたことを受け止めることが難しく、生きること自体が困難な状況にあります。皆さんにもできることがあります、それはわたしたちのために祈ってくださることです。そして『シリアを忘れないで』ください。」

わたしが宣教事業の担当者になってはじめての総会でしたが、大変印象に残っています。「シリアを忘れないで」ということば。そして「生きること自体、故郷にとどまること自体が困難であり挑戦です」という厳しい現実。会場の空気は一瞬で変わりました。今なお、今日の世界で、このような厳しい紛争や迫害が続いていることに驚きを禁じえませんでした。

使徒言行録の11章には使徒聖パウロとバルナバによって、はじめて非ユダヤ人に対する宣教が行われ、「このアンティオキアで、弟子たちが初めてキリスト者と呼ばれるようになった」（使徒11・26）と説明されていることがよく知られています。インターネットや高度な情報社会の台頭によって、世界中の人々があたかも一つになり、すべての情報が迅速にやりとりできているかのような感覚を持

ってしまうこともあります。難民・移住移動者の方々にとっての現実には「わたしたちを忘れないでください」という呼びかけなのだと思います。本当にわたしたちは、今日の第二朗読に記されていたとおり「何事も利己心や虚栄心からするのではなく、へりくだって、互いに相手を自分よりも優れた者と考え、めいめい自分のことだけでなく、他人のことにも注意を払いなさい。互いにこのことを心がけなさい」（フィリピ2・3-4）というパウロの招きに心を留め、弱い立場の人、貧しい人びとを忘れず、関心を持ち続けることが必要です。

このように考えてみますと、今日のマタイ福音書に描かれた「二人の兄弟のたとえ話」は、わたしたちの身近な隣人、社会的弱者に対する意識を変えていくように促していると言ってもよいでしょう。「子よ、今日、ぶどう園へ行って働きなさい」と言われると、兄は最初に「わたしは望みません。いやです」と答えますが、「後で考え直して出かけ」ていきました（マタ21・29）。他方、弟は「お父さん、承知しました」と答えますが、結局、出かけません（マタ21・30）。わたしたちは、天の御父のみ旨を行うよう招かれています。ことばや思いだけでなく、行いをもって身近な人々への愛を実践することができますように、聖霊の豊かな助けを願い求めてまいりましょう。

カトリック立川教会 主任司祭
東京教区 ヨゼフ 門間 直輝

●年間第26主日聖書朗読箇所：

- ① エゼキエル18・25-28 —答唱詩編—詩編25より
- ② フィリピ書2・1-11
- ③ マタイ21・28-32